

新型インフルエンザ流行に対する取り組み

一患者・透析スタッフに対する影響と効果一

(医)吉川内科小児科病院

○水野谷幸代 志田梨江 土屋真奈美 吉川昌男

【はじめに】

H21年4月豚インフルエンザの人への感染が確認され、本邦での感染発生の懸念が強まっていた。透析室は集団治療を行っている特性上、院内感染の可能性が高率である。そこで、当院では、メキシコで流行拡大の一報があった時点から新型インフルエンザ対策に取り組んだ。

【目的】

当透析室での新型インフルエンザ感染対策について発生件数と患者及びスタッフの意識調査から効果を検証し、更に確実な対策の確立につなげる。

【研究方法】

I.期間 平成21年4月～11月

II.対象 研究に同意の得られた血液透析患者163名(男性100名 女性63名 平均年齢 68才) 透析室スタッフ24名(Ns16名 ME8名)

III.方法

- ①国外の感染報告以降、警戒レベルの引き上げに応じて患者・家族に対し、計10回の文書による情報提供を行なった。
- ②通院介助を行う家族や介護保険事業者に情報提供と協力を要請した。
- ③フェーズ5の段階からスタッフ用に感染対策マニュアルを作成。警戒レベルに応じて更新し、スタッフへの伝達・共有化を図った。
- ④インフルエンザ発症件数を調査した。
- ⑤患者・透析室スタッフに対し新型インフルエンザ対策についてのアンケート調査を実施した(新型インフルエンザ流行に対する不安、病院の対策に対する理解、予防行動の有無について)

【結果】

I.国外の感染報告以降、患者・家族に対し計10回の文書による情報提供(1)インフルエンザの感染動向(2)発熱時・感染の可能性がある場合の対応(3)予防行動(4)透析室の感染対策、治療方針(5)タミフル予防服薬の効果と内服時期(6)ワクチン接種時期)を実施した。

II.同時にスタッフのマニュアルを作成し、予防策や陽性者発生時の対応を周知徹底のうえ実践し、適宜修正を行った。

III.国内の感染者発生以降、当院一般外来患者の罹患率増加に伴い、透析患者の出入り口を統一し、予防行動を徹底するよう掲示した。5月に都内で感染者が発生し、感染動向が不明確だったため、患者にタミフル予防服薬を実施した。その後、国内での流行拡大の動向や今回の新型インフルエンザが弱毒性であったことから、タミフルの服用は2回のみとした。調査期間中、数名の発熱者がみられたが、インフルエンザテストで陽性者はなく、抗生剤その他の治療で改善した。

IV.アンケートの結果、患者は、「不安有り」は46.6%であり、理由は「感染に対する不安」が最

も多く57%であった。「不安無し」は53.4%、理由は「病院の対応で安心」29%と最も多かった。患者全体で「病院からの情報提供が役立った」は84%。「予防方法や発熱時の対応を理解・実施した」は80%以上であった。透析スタッフでは「不安有り」は80%。理由は「自分または患者の発症時の対応」であった。「不安無し」20%であった。「早期からの対策は有効」は96%であり、全員が予防策を実施していた。

【考察】

I. アンケートの結果から、国外発生時より早期に新型インフルエンザの動向や病院での対策など情報提供を繰り返し実施したことで、患者の動揺や不安の緩和につながったと考える。

II. 予防行動実施率が96%と高値であったのは般外来でのインフルエンザ罹患率増加に伴って、透析患者専用出入り口など環境の整備をしたこと、患者・家族へ手洗い・うがい・マスク装着の徹底を依頼し、発熱時は来院前に電話をして指示を仰ぐことなど繰り返し指導したことが予防行動の徹底に繋がっていた。

III. スタッフに対しても早期に対策マニュアルを整備し、実施可能な対策を講じてきたことがマニュアルの周知、徹底につながり感染に至らなかったと考える。スタッフの不安が患者に比べ強かったのは、感染に対する責任意識が理由であった。不安の理由を対策につなげることでマニュアルがさらに充実し、より感染対策の強化につながるのではないかと考える。

【結語】

新型インフルエンザ対策は感染件数・意識調査の結果において一定の効果があった。